

近藤原子力委員会委員長の海外出張報告

平成22年11月30日

1. 目的

11月15日（月）～16日（火）にワシントンDCで開催される米国の原子力の将来に関する大統領のブルーリボン委員会（BRC）第4回会合に出席し、我が国の原子力政策、特にサイクル政策についての報告を行う。

また、11月18日（木）到北京で開催される第11回FNCA大臣級会合に出席し、我が国の原子力利用等の現状に関する報告等を行う。

2. 日程

- 11月14日（日） 東京／成田発 → ワシントン着
- 11月15日（月） ブルーリボン委員会出席、報告
- 11月16日（火） ワシントン発 →
- 11月17日（水） 東京／成田経由 → 北京着
- 11月18日（木） 第11回FNCA大臣級会合出席、報告
- 11月19日（金） 北京発 → 東京／羽田着

3. 概要

（1）BRCにおける報告

近藤原子力委員長は、米国ワシントン市、マリオット・メトロセンターホテルにて開催された「米国の原子力の将来に関するブルーリボン委員会」の第4回会合において、バックエンド政策を中心とした我が国の核燃料サイクル政策の概要等について発表を行った（発表に使用した資料は、原子力委員会ウェブサイト公表済）。

これに対して、各委員から、日本のエネルギー事情、もんじゅの運転再開に至るまで長時間を要した原因、プルサーマル採用の理由、プルトニウムインベントリの変化の見通し、六ヶ所再処理工場における保障措置の考え方、プルトニウム在庫と場所を公表していることに対する核セキュリティ上の課題、日本の核セキュリティ対策、再処理の経済性、もし今から再処理するかどうかという選択に直面したらどういう選択を行うか等の質疑がなされ、委員長は適宜返答した。なお、同日は我が国の他、フランス、カナダ、ロシアの政策についても報告と質疑応答があった。

(2) 第11回FNCA大臣級会合への出席

近藤委員長は11月18日中国北京市の釣魚台国賓館で開催された中国国家原子能機構(CAEA)と内閣府原子力委員会共催の第11回アジア原子力協力フォーラム(FNCA)大臣級会合に出席し、我が国の現状についての報告を行うとともに、CAEAのChen主任(月探査衛星嫦娥2号の打ち上げ責任者でもあったとのこと)とともにこの会合の共同議長を務めた和田内閣府大臣政務官が退席した午後のセッションにおいて共同議長を務めた。この会合の概要は別に報告がなされるので、所見もそれに関連して述べることにし、ここでは以下を記すにとどめる。

- ① CAEAのChen主任がFNCAに対する中国の希望として、CARRやCEFRの建設を例に挙げてエネルギー研究開発における協力を強化したいこと、現在24基の原子力発電所を建設中であるからしてCNECはいまや世界水準の原子力発電所設計、建設、運転の力を持っているので、メンバー国の原子力発電所建設についてもFNCAの枠組みで協力したいこと、また急速な規模の拡大であらゆる分野で人材が求められていることから、人材育成について経験を交流し、協力したいことを掲げたことが印象的であった。
- ② このところ、この大臣級会合で共同声明を出すことが続いたが、これを定着させることについて各国の意見を徴したところ、その内容は各国と具体的行動を共有することを謳うものであるべきで、各国の行動計画を踏まえ、相当の期間をかけて準備されるべきとの意見が多かった。
- ③ 大臣級午餐会は中国と日本だけが二人、他国は1人の参加で、14人が円卓を囲んで親しく自由な意見交換がなされた。その席でモンゴルから大臣級会合を主催したいとの希望が表明され、関連して、日本と日本以外の国が交互にこの会合を開いていると、日本以外の国は20年に一度ということになるので、日本は4年に一度にすると少し制度を考え直すべき時が来ているのではないかとの発言があり、検討を約した。
- ④ 最後のセッションはプレスに公開され、共同声明と会議要約を確認し、プレスの質疑を受けるものであったが、質疑は第一が中国における原子力利用の現状について中国に問うもの、第二が私に対してFNCAの直面している挑戦と今後の展望を問うもの、第三が新たに原子力発電に取り掛かろうとするベトナムに対する質問であった。最後の質問に対して、タン・ベトナム原子力委員会委員長が、当面ロシアからの導入に力を注ぎ、ついで日本から技術を導入するが、そのうち、韓国や中国の技術も導入することあるべしとしたのが印象的であった。